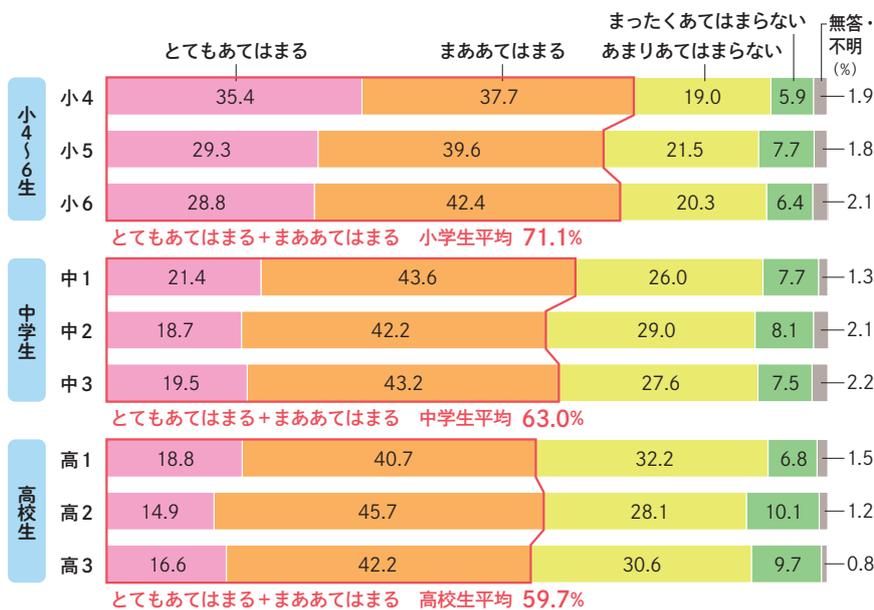


教員が子どもに寄り添う指導と、 子どもの学びとの関係

「個別最適な学び」を教員側から整理した概念である「個に応じた指導」は、新学習指導要領ではより重視されている。そこで、教員の子どもに寄り添う指導が、子ども自身にどのように受け止められているかに着目し、教員の指導について考察していく。

1 子どもに寄り添う指導は、低学年ほど広く受け入れられている

図1 「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」(学年別)



学年が上がるほど自ら学ぶ姿勢が重要に

2021年夏、全国の小・中・高生を対象に、教員が子どもに寄り添う指導を示す「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」について、どの程度あてはまるかを聞いた(図1)。「あてはまる」と回答した割合は、小4生が7割強と最も高く、おおよそ学年が上がるにつれて下がっていく傾向だった。

一般に、小学校から中学・高校に進むと、子どもに寄り添う指導が減少していくと考えられる。言い換えれば、教員の指導に頼ることなく、子どもに自分から学ぶ姿勢を求めている結果と考えられる。

中学校では中・下位層に寄り添う指導を

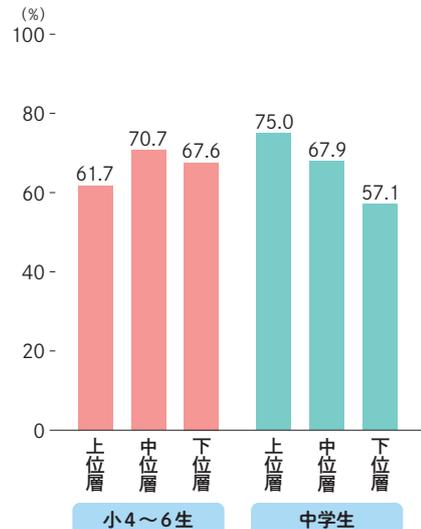
次に、小・中学生において、この結果を2020年(前年)と2021年(当年)の成績層別に見ていく。まず、2020年の成績層別を見ると(図2①)、小学生では、「あてはまる」比率が高い順に中位層>下位層>上位層となり、中位や下位の成績層で教員の寄り添う指導の肯定率が高い。一方、中学生では、上位層>中位層>下位層であり、上位ほど肯定率が高い。2021年の成績層別では(図2②)、小学生では上位層>中位層>下位層と、上位ほど肯定率が高く、2020年とは異なる結果になった。ただ、中学生では2020年と同様の結果であった。

小学生については元々、中・下位層の子どもに寄り添った指導が行われており、その影響が2021年の成績向上につながった可能性がある。一方、中学生では、中・下位層に寄り添った指導が十分に行き届いていないと推察される。中・下位層には、より個に応じた指導が求められるのではないだろうか。

*「とてもあてはまる+まああてはまる」の合計。

図2 2021年「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」(成績層別)

① 学校段階×2020年(前年)の成績層別



② 学校段階×2021年(当年)の成績層別



注1) 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。

注2) 成績は、小4~6生は国語、社会、算数、理科の自己評価の合計、中学生は国語、社会、数学、理科、英語の自己評価の合計を、3つの層が均等になるように分けた。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2020・2021」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。2015年から毎年、小学1年生から高校3年生までの親子約2万組を対象に調査し、子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。このうち、2020・2021年調査のデータを分析に用いた。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://berd.benesse.jp/special/childedu/>

データ解説

ベネッセ教育総合研究所
主任研究員

岡部 悟志 おかべ・さとし



本調査のほか、乳幼児とその父母を対象としたパネル調査（縦断調査）にもかかわる。中でも、子どもから大人への移行段階にある青年期の発達・成長プロセスに関心を持ち、研究を進めている。

2 教員の寄り添う指導を受け入れている子どもほど、授業や学びに積極的

図3 教員の寄り添う指導と子どもの意識との関係（小4～6生）

	先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる				「とてもあてはまる」 -「まったくあてはまらない」の差
	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
授業が楽しい	88.7	78.6	61.1	45.1	43.6
授業の話し合いで積極的に発言する	69.0	52.1	39.4	30.0	39.0
自分のクラスが好きだ	92.0	89.4	75.7	55.9	36.1
勉強が好き	73.7	56.9	47.1	44.7	29.0
自分に自信がある	61.4	52.1	45.3	39.4	22.0
失敗しても自信を取り戻せる	68.9	58.5	49.9	47.5	21.4
自分のよいところが何かを言うことができる	61.8	56.9	49.9	42.4	19.4

注) 「とてもあてはまる」層と「まったくあてはまらない」層の肯定率の差(最右列)が大きかった順に掲載。

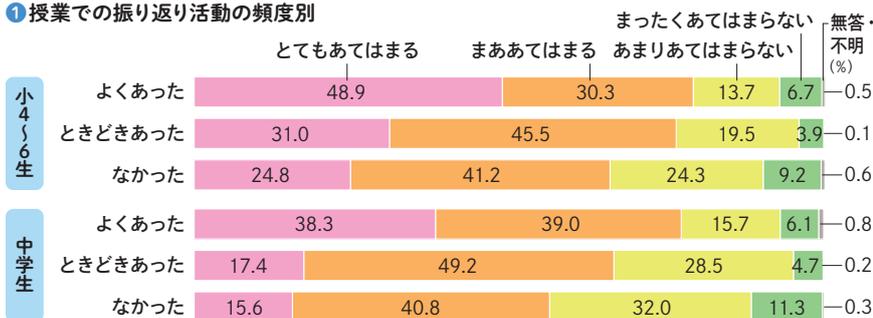
寄り添う指導と学習意欲は正の相関

小学生を対象に、教員の指導の受け入れと子どもの意識との関係を見ていく。図3は、「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」への回答別に、表の縦軸にある子どもの意欲や自己肯定感に関する項目（抜粋）への肯定率を示したものだ。おおむね「とてもあてはまる」に近づくほど、縦軸の項目を肯定する割合が高くなっている。

また、最右列に示した差の大きい順の上位には、「授業が楽しい」「授業の話し合いで積極的に発言する」「勉強が好き」など、学習意欲・姿勢を示す項目が上がり、寄り添う指導と呼応しているとも考えられる。「自分のクラスが好きだ」「自分に自信がある」「失敗しても自信を取り戻せる」など、自己肯定感を示す項目との関連性も比較的高い様子が見える。

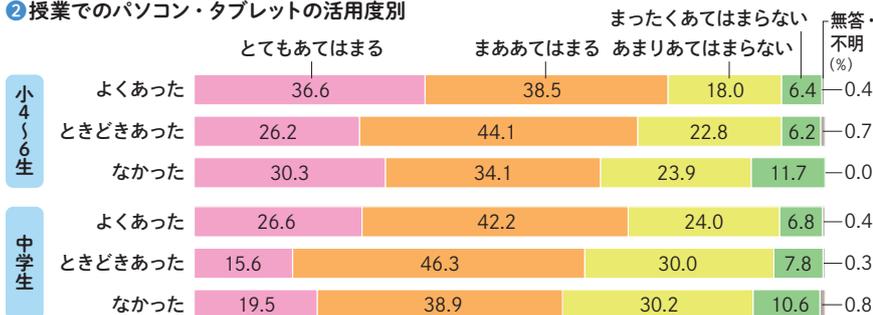
図4 「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」と授業活動の関係

① 授業での振り返り活動の頻度別



注) 授業での振り返り活動の頻度別: 学校の授業について尋ねた設問で、「自分の学習のやり方やプロセスをふりかえる」ことが「よくあった」「ときどきあった」「なかった」(あまりなかった+まったくなかった)の3段階に分類したもの。

② 授業でのパソコン・タブレットの活用度別



注) 授業でのパソコン・タブレット活用度別: 学校の授業について尋ねた設問で、「パソコンやタブレットを使う」ことが「よくあった」「ときどきあった」「なかった」(あまりなかった+まったくなかった)の3段階に分類したもの。

振り返り活動の頻度やICT活用度も関連

最後に、授業での振り返り活動の頻度、授業でのパソコン・タブレットの活用度別に「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」のあてはまる割合を見た(図4)。振り返り活動の頻度が高いほど、小・中学生とも「あてはまる」と回答する比率が高く、パソコン・タブレットの活用度も同様の傾向だった。学習の振り返り活動や、パソコン・タブレットの活用が、教員の寄り添う指導の肯定につながるとも考えられる。

寄り添う指導を目指す中で、振り返り活動、ICT活用を重ねて実施すれば、子どもの意欲・自己肯定感が高まるといふ好循環へとつながることが期待できる。「個別最適学」の実現にも一層近づくののではないだろうか。